

大 学 図 書 館 問 題 研 究 会 京 都

〒607 京都市山科区大宅山田町34 京都橘女子大学図書館 小林倫道気付  
(Tel) 075-574-4118 (Fax) 075-574-4124

近畿 5 支部 新春合同例会  
仮 題 「情報リテラシーと図書館」

講師：柴田正美 氏 (三重大学 人文学部)  
他に、現場報告者も若干名予定しています

2月1日(土) 午後1:30～4:30

大阪 市立 弁天町市民学習センター 講堂

大阪市港区弁天1-2-2-700 O R C 2番街7階 ☎06-577-1430  
オーケ

JR大阪環状線・弁天町駅 北側改札口  
地下鉄中央線・弁天町駅 西側改札口 2A出口 } から  
連絡通路を通り、中央エレベーターで7階へ

- ★ 当日参加可、会員外可。会費無料。
- ★ 終了後、懇親会を催します(5時～。会費5000円程度)。  
懇親会の参加希望者は1月27日までに下記宛てご連絡下さい。

あけまして  
おめでとう  
ございます

【参加申込・問合先】

0729-78-3782 (寒川)

06-850-5049 (村上)

## 亀岡市図書館情報ネットワークシステム

大館 和郎

亀岡市立図書館と京都学園大学図書館、美山町立図書館をコンピュータネットワークで結び、蔵書の相互貸借を行う「亀岡市図書館情報ネットワークシステム」が、平成8年7月23日から稼働を始めた。本システムは亀岡市立図書館をセンター館として、各図書館の書誌データをセンター館のコンピュータに登録し、相互利用する。書誌データ件数は京都学園大学図書館20万、亀岡市立図書館11万、美山町立図書館1万である。

業務の流れを説明すると、担当職員は各参加図書館に設置された端末機で書誌検索を行い、該当資料があれば、所蔵検索を行う。所蔵館がわかれば、依頼データを作成する。依頼された館は受付館として回答し、貸出を行う。借り受ける館は資料が到着すると、借受確認をする。資料を返却する場合は、まず借受館が返却確認処理を行ない、現物が返却された時点で受付館が返却確認処理を行う。資料の送付・受け取り以外の手続きはすべて端末画面でできる。いわばNACISIS-ILLシステムのミニ・ローカル版のようなものである。貸出は図書館間貸出となり、冊数は10冊（各参加館図書館に対して）まで、期間は30日まで借りられる。

本システムの全体構成はセンター館のUNIXサーバとUNIXワークステーションを接続したイーサネットLANと単位館のパソコンやワークステーションを結ぶ広域ネットワークからなる。ネットワークは公衆電話回線でリモート端末パソコンと接続するか、通信の頻繁なところについて専用回線かISDNによるLAN間接続を行う。センター館については既設の自館システムとの接続も行う。UNIXサーバ内に総合目録データベースを置き、各端末からアクセスを行う。

依頼件数（学園大→他館）は今のところ0件。受付件数（他館→学園大）は、9月が5件、10月が3件、11月が7件、12月は2件でした。サービスが始まって半年たらずでもあり、今後どのように変化するかまだわからない。貸出資料の内容については、多様な主題にわたっておりはっきりした傾向のようなものは見受けられない。大学図書館と公共図書館とでは所蔵する資料の特色が違い、相互に補完し合う関係にあるので相互利用のメリットは大きいと思う。

本システムの実現への歩みは、平成5年4月亀岡市が自治省よりコミュニティ・ネットワーク（図書館情報ネットワークシステム）推進プロジェクトの指定を受けたことに始まる（亀岡市を含めて全国で15団体が指定された。）このプロジェクトを実現する場合、次の3点が前提条件とされている。

- (1) 相互貸借を含む図書館サービスの近代化・広域化を図るため、所蔵館の把握を目的とした総合目録データベースの構築と検索、所蔵館への図書貸出依頼および図書物流管理など図書館間の情報ネットワーク機能がある。
- (2) 情報サービスの充実・高度化を図るため公共図書館間の相互連携に加え、国立国会図書館、大学図書館、専門図書館など館種を超えた情報ネットワークの接続である。

(3) 構築された図書館情報ネットワークシステムを図書館以外の一般家庭、公共施設など身近で利用する情報ネットワーク機能がある。

このことからわかるように本システムはさらに拡大することを目指しており、将来的には京都府立図書館や京都市立図書館ともネットワークを結ぶことが当面の課題となっている。現在大学図書館同志の情報ネットワークは整備されつつあるが、公共図書館とのネットワークはこれからである。しかし文部省主導の学術情報ネットワークシステムに大学図書館だけでなく公共図書館が参加している一方で、自治省主導の図書館情報ネットワークシステムが公共図書館を主としながらも、大学図書館の参加を促している状況がある。二つのネットワークシステムの関係を見直す時期がいつかやってくるのではないだろうか。

(おおだて・かずお／京都学園大学図書館)

## 大学キャンパスにおける障害者サポート

— カリフォルニア州の一大学の事例から —

松延 秀一

年齢や障害の有無を問わずだれでも使えるコンピュータの研究開発と標準化をめざしているTRONイネーブルウェア研究会（TRONとは、坂村健・東大教授が提唱した日本独自のOS）が、昨年12月7日、東京で上記のテーマでシンポジウムを開いた（手話通訳付き）。このシンポジウムでは、カリフォルニア州立大学ノースリッジ校（CSUN）の障害者センター（Center on Disabilities）所長のハリー・マーフィー氏が講演、また関連して、東大総合図書館の河村宏氏による「情報アクセスにおける図書館の役割」という報告などが行われた。

このCSUNには、既に30年以上前から聴覚障害学生の受入れを支援する聴覚障害センター（National Center on Deafness）が設置されており、聴覚障害教育関係の間ではよく知られていた。実は小生も学生時代、このセンターの活動報告書の日本語訳を入手（『聴覚障害者のための高等教育—カリフォルニア州立大学編』海外聴覚障害教育研究会1976年）、これをもとに、京大当局（身体障害者問題委員会—当時）に対してこの種の支援センターを設置してほしいと要望したことがある。その後、「身体障害学生相談室」という全学的な調整のための委員会が置かれることになった。そのCSUNは最近、聴覚障害センターとは別に障害者センターを設置し、聴覚障害センターの副所長だったマーフィー氏が所長となった。その彼が来日、講演したわけである。

ところで、アメリカの大学における障害者受入れ体制の整備は、1990年に成立したADA（障害を持つアメリカ人法）の影響もあって一層加速している。ADAは、公営民営を問わず、不特定多数の人々が利用する公的施設（大学を含む）では障害者も利用できるようにする義務を課す条項も含む、障害者差別禁止法だからである。とは言え、30年以上の

障害学生受入れの歴史を持つCSUNは、全米でも一、二を争うくらい、受入れ体制の整備は充実している。学生数2万5千人中、障害学生は千人をこえ、視覚障害250人、聴覚障害250人がこの中に含まれるという。

さて、マーフィー氏の講演内容は障害者センターの活動の紹介であった。

センターのプロジェクトの一つに、Students with Disabilities Resources (SDR)があり、支援機関でもある。車椅子や点字ワープロの貸出、障害者向けの学内設備の説明会、学内移動支援、カウンセリング、音読サービス（対面朗読のことだろう）等々。またSDR内にはコンピュータアクセスラボというのがあり、障害学生がコンピュータを利用できる方法を提供することを目的としている。機材にはIBMやアップル始め多くのコンピュータ会社の協力・寄贈を受けているという。これだけでも目もくらむほどである。このラボには、マーフィー氏の言によれば「テクノロジーを障害を持つ人々にもっと身近なものにする」という使命を現実のものにしているとのことである。

続いて河村宏氏（東大総合図書館）から「情報アクセスにおける図書館の役割」という報告があった。

まず、図書館の情報提供は、的確なガイダンス（利用案内）があって初めて「生きた」ものになるとの一般論を述べた上で、障害を持つ人々を図書館の利用者にするにはガイダンスは必須、個々の障害を持つ利用者へのサービスはここから始まる、とする。ガイダンス担当者は、障害を持つ利用者との十分な対話の中で一緒に考えていく姿勢が重要。この場合のガイダンスとは、担当者に対し個々の障害を持つ利用者からの要求に関するガイダンスの場でもある。障害者サービスは利用者の要求に基づいて整備されるべきもの、である。

その後、IFLAの動きの紹介や次世代録音図書をめぐる国際的な動向が紹介された。むすびを引用しよう。

「大学キャンパス内の情報面における視聴覚障害者へのサポートは、基本的には人間によって実現されるものである。つまり、施設・設備面のバリア・フリーを実現しても、なお、サービス面での日常的なサポートと資料・情報の蓄積が要求される。図書館は積極的なガイダンスを行うことによって様々な障害を持つ利用者の要求を特定しそれに対応したサービスを開発できる。」

「キャンパス内の障害者を大学が積極的にサポートすることによって、大学は学内の障害者の要求に応えるだけでなく社会的な責任も果たすことができるのである。」

小生がこうしてこの報告文を書いているのも、河村報告のこの、大学の社会的責任ということを知って頂きたいからに他ならない。日米間の余りの格差の大きさに衝撃を受ける人も多いのであるが、それでもまずはできることから始めてみなければならない。『障害者サービス』を読むのも一法ではある。むろん図書館のみならず大学全体としての受入体制の整備が必要であり、その中で図書館の役割を明確化していく必要があろう。

ところで京都では昔から障害学生を割によく受入れていたように思う。小生が学生だった20年前でも、京大の他、同志社、立命、京都府立、龍谷、橘女子、等在学していたし、

学生手話サークルも存在していた。しかし受入れはしたものの、障害の困難を除去するための大学からの支援はほとんどなかったと思う。皆さんの職場にも案外近くに障害を持つ学生は在学しているはず、学生部等の協力を得て、一体どんな障害を持つ学生が何人在学しているのか、まずはそこから始めてみてはどうか？

(まつのぶ・しゅういち／京都大学化学研究所図書室)

目次	近畿5支部新春合同例会 …………… 1頁
	亀岡市図書館情報ネットワークシステム (大館和郎) …………… 2頁
	大学キャンパスにおける障害者サポート (松延秀一) …………… 3頁
	大図研京都数珠つなぎ⑩ …………… 6頁

支部報に関するご意見は最寄の支部委員または編集気付(京都橘女子大学 ☎075-574-4113 (FAX 075-574-4122) ♥ PXX01651@niftyserve.or.jp またはNIFTY-Serve:PXX01651小林)まで

## 支部委員会だより

第5回／於・同志社大学明德館教職員組合事務局室／12月10日(火)午後7:00～

### 【主な議題】

- ① 支部報編集内容について(1月号、2月号)  
原稿依頼状況の確認、掲載内容の調整。
- ② 京都研究集会の総括  
17名参加。参加者の反応、感想等で意見交換。
- ③ 支部委員の補充について  
支部報編集体制の引き継ぎも展望して。
- ④ 研究交流諸活動について(議案書方針に基づき)  
京都研究集会、大図研大学等の研究活動のあり方や、班活動等を中心とした日常的活動の活性化について意見を交換。
- ⑤ 近畿5支部合同新春例会について  
企画状況(主催:大阪支部)の確認。PR手段の確認。

参加:篠原、竹本、大館、井上、川北、小林

●—●—●●●—●●—●—●●●—●—●●—●●●●—●—●●—●—●●●●—●  
 | 戦慄の新コーナー!!

● 大図研京都数珠つなぎ 第12回

立命館大学  
 経済学部事務室

若井 勉 さん

## I F L A 心の土産

過日、北京のIFLA大会(8/26-8/31)に参加した折のこと、中国政府主催の歓迎の宴が人民大会堂でありました。

指定されたテーブルに着席した小生は、隣の席にフランスの児童図書館員の G.Patte さんという気品の高いご婦人といっしょになりました。彼女はへたな英語も余りうまく話せない小生に大変な気配りをしてくれました。調子者の小生は止むなく Broken English の宝刀を出さずにはいられられなくなりました。このIFLAでは、ロシア語とフランス語しか喋られないグルジアの図書館員と出会うなど、言葉に関しては殊の外貴重な経験をしました。

さて、宴会が進むにつれて、同テーブルのインド、カナダ、イギリス、中国、ナイジェリアの図書館員同士の会話がたいへん弾みました。メドレーで演奏される世界各国の音楽の影響もあり、音楽の話やフ란の歴史等が話題となり、随分といろんな話をいたしました(つもり)。そのなかで、私の好きなスペインのパブロ・カザルスについて大いに話が弾みました。カザルスの音楽家としての生きざまやその思想のこと、演奏曲目のこと、ブラド音楽祭のことなどそれに関わるいろいろお互いの思いなどを交流しました。勿論美味しい中国のお酒とオードブルがありました。

その話の中で私がたまたま見た、画家・安野光雅氏がスケッチ旅行をしながら風土や歴史を語り、パブロ・カザルスの生涯をフットアップするNHKの番組を紹介したところ、偶然にもパリで彼女は取材の時に親しく懇談をしたとのことだったものですから、何をかいわんやの関係になりました。そして、音楽がいかにか人の心を捉えるものか、詩や文学もその深い思想のもとに多くの人の心を捉えるすばらしいものであるということ、こども心を慈しみ、図書館というところでグローバルに開花させることのすばらしさと私たち図書館員の崇高な使命がこのうえなく重要であることを語る彼女と大いに共感していました。別れに際し、これからも交流いたしましようということと、日本に帰られたら安野氏に宜しくお伝えくださいとのことで別れを惜しみました。

私はカザルスの番組にひどく感動したことを思いおこし、安野氏に手紙を差し上げる次第となりました。特にカザルスの鳥の歌に少なぞらえて作曲され、広島原爆をモチーフにしたオラトリオ『鳥の歌』(尾上和彦曲)の演奏CDを同封し、北京での伝言をしたためたのでした。

安野氏からの返事の葉書には、「CDは感動した。人間の心はとどまるところを知らずに広がり、世界が近くなっている。人間の出会いは多くの可能性を秘めたすばらしいものである。このことが平和な地球の糧になる」との一文が宥められていました。

私はこの葉書のなかにIFLAの心を教えられたような気がしました。人の心なくして図書館サービスなどあり得ないことを再認識させられたと喜んでいきます。

### 「数珠つなぎ」のルール

①内容は硬軟自由。②原稿量も1ページ程度以上で自由。③執筆者には次回執筆者を指名する義務があります。④指名された人はもちろん拒否権なし。